

三つの海戦 死線越えて

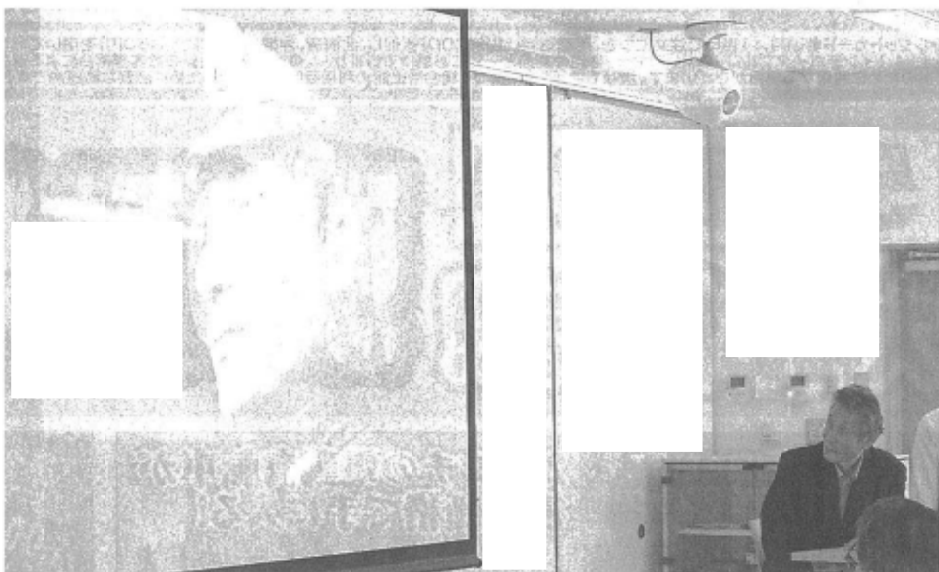
語り継ぐ戦争

2

かながわの戦後70年 第4部

映画がいくらリアルに描いても、実際の戦場とは全然違うんだ。映画にはお血が甲板にたまり、艦が揺れるたび、右に、左にザッ！と流れるさまは、いまも

元士官・池田武邦さん(91)



5月末に開かれた湘南高校同窓会主催の講演会。池田さん(右)の海軍時代の写真も紹介された＝藤沢市

「平和がいい」焦土の復興へ力

鮮明に覚えている。太平洋戦争末期の三つの海戦すべてに、池田武邦さん(91)は士官として戦った。海軍兵学校の同期(72期)で同じ経験をしたのは自分だけという。取材に対し、池田さんは当時の経験を語った。

1924(大正13)年生まれ。旧制湘南中学(現・県立湘南高校)から40(昭和15)年に兵学校へ。父も兵学校出身で、日露戦争で連合艦隊旗艦だった横須賀の記念艦「三笠」の監督を務めた。2年10カ月で繰り上げ卒業、少尉候補生で任官した。19歳だった。

軍人の道を選んだのは、やはり時代だったと思う。僕が子どもの頃は満州事変など「事変」続きで、漫画なんかも盛んに軍を持ち上げていた。だから自然とね……。父は何も言わなかった。

乗り込んだのは最新鋭の軽巡洋艦「矢矧」。戦局はすでに悪化の一途で、44年6月、失えば日本本土が米軍の爆撃対象になるサイパン島、テニアン島沖での「マリアナ沖海戦」に臨んだ。だがペテランの飛行機乗りは多くがすでに戦死、

残る操縦士は経験不足で、次々と撃ち落とされた。

潜水艦の魚雷攻撃を受けた空母も目の前で沈んだ。来るのが分かっていても避けられない。これが戦争かと現実を知った。

航空戦力を失い、敗戦必至のなかでの「レイテ沖海戦」(同年10月)では戦艦「武蔵」が沈没。矢矧も爆弾と機銃掃射で攻撃され、甲板は血まみれに、船体に大きな穴があく。

横にいた仲間が撃たれ、倒れても、戦闘中なので運びようもない。生き残ったのは運というしかない。人間の生死は、自分ではどうにもならないものに動かされている。そう考えるようになった。

45年4月、沖縄本島上陸を始めた米軍に、稼働できる少ない艦船を総動員して突っ込む「海上特攻」命令が出た。矢矧も出撃したが、鹿児島県沖で集中攻撃を浴び、沈没する。

目の前に海がグ、グ、グと迫り、みんな、油に覆われた海に投げ出された。油まみれで、立ち泳ぎしながら救援を待った。向こうに(戦艦)「大和」が見え、爆発して巨大な雲が立ち上がった。5時間ほど泳いだろうか、味方の駆逐艦が救助に来た。

沖縄特攻は無謀な作戦と言われる。だがもし矢矧や大和が戦利品にされ、ニューヨークの海岸につながれたら……。沈んだおかげで生き恥をかかずに済んだ、とは自然に思う。

乗る船がなくなり、広島県の潜水学校教官に転じた。日曜日以外を歩くと、無邪気に遊ぶ子どもたちが目に入る。「あの子たちはこれからどうなる？」との思いに駆られた。日本が降伏したと聞き、ほっとした。

東京は焼け野原と化していた。復興に役立ちたいと東京大で建築を学ぶ。

自分なりに責任を感じた。海軍が日本を守るつもりが、守るどころか、こんなにしちゃったのか、と。だからせめて、この焼け野原を何とかしよう。

霞が関ビル、新宿三井ビルと超高層ビル設計の中心となり活躍。戦死者の慰霊活動も長く続けた。「自分にとって戦後は余生」といい、こう繰り返した。

平和ほどありがたいものはない。いつ殺されるかわからない時代に生きながら。絶対、平和の方がいいですよ。(小化青人)